名古屋港

名古屋港管理組合

〒455-0033　名古屋市港区港町1-11
☎052-661-4111
URL：https://www.port-of-nagoya.jp/

1. 概況

名古屋港は、日本列島のほぼ中央部、太平洋に面した伊勢湾の北端に位置し、明治40年(1907年)11月10日の開港以来、中部圏の海の玄関として着実に発展を続けてきました。特に近年の名古屋港の港勢においては、平成30年の総取扱貨物量が約1億9,659万トンと平成14年から17年連続日本一を記録しました。中でも外国貿易貨物量は約1億2,695万トンと平成12年から19年連続で、また、貿易額に関しても約17兆8,214億円で日本一を記録しました。コンテナ貨物量は約5,016万トンを記録し、コンテナ個数では約288万TEUとなっています。

名古屋港の背後圏には、自動車、工作機械、航空宇宙、鉄鋼、電気製品等、世界的な「ものづくり産業」が集積しています。特に、愛知県の製造品出荷額は1977年（昭和52年）以来、連続して全国1位の実績を誇っています。このものづくりの一大集積地で必要とされる原材料や産みだされる製品の多くが名古屋港を通じて行き交うなど、名古屋港は「ものづくり中部」を物流面で強力に支えています。

名古屋港は、飛島ふ頭・鍋田ふ頭に代表される商港機能と南部（鉄鋼、電力、石油精製、LNG等）、西部（航空宇宙産業、鋼材・木材加工等）に広がる工業港機能の両面を持っています。

飛島ふ頭は、南側と東側にコンテナターミナルを擁する名古屋港の一大コンテナ物流拠点です。南側では、コンテナ船の大型化に対応した水深16m（総延長750m）の高規格大水深耐震強化のコンテナ岸壁2バースが日本初となる自働搬送台車（AGV）や遠隔自働RTGを導入した自働化ターミナルとして稼働し、飛島コンテナ埠頭株式会社（TCB）が運営しています。ここでは、さらに延長400mの第3バースが計画されています。東側では、飛島ふ頭北コンテナターミナル3バース、NCBコンテナターミナル3バース、飛島ふ頭南コンテナターミナル2バースの計8バース（総延長2,220m）が一直線に整備されたコンテナターミナル群として稼働しています。この背後には約190万㎡に及ぶ流通機能基地が機能的に配置されています。現在、NCBコンテナターミナルの3バースのうち2バースの増深（水深12m→15m）及び耐震強化を行っています。また、飛島ふ頭南コンテナターミナルではコンテナ取扱機能の強化に向け、拡張用地の整備に取り組んでいるとともに、大型ガントリークレーン1基の新設と3基のリプレースを行っています。

飛島ふ頭と並ぶコンテナ物流拠点である鍋田ふ頭では、財団法人名古屋港埠頭公社（現名古屋港埠頭株式会社（NFK））が整備した第1バースを含むコンテナ岸壁3バース（総延長985m）による高規格コンテナターミナルが稼働しています。このコンテナターミナルは、港湾運送事業者9社の共同出資による名古屋ユナイテッドコンテナターミナル株式会社（NUCT）が運営し、3バース一体となった効率的な運用を実現しています。現在、遠隔操作RTGの導入に向けた取組が進められています。

また、名古屋港内全てのコンテナターミナルを一元管理するシステムとして、名古屋港統一ターミナルシステム（NUTS）を導入し、荷役作業の効率化や処理時間の短縮化が図られ、コスト削減に貢献しています。現在、更なる機能向上を図るため、NUTSの改良に取り組んでいます。

更に、飛島ふ頭各ターミナルゲートでの搬出入手続きを集約する「集中管理ゲート」も運用されており、NUTSと連携することで、ゲート前での滞留の解消、波動性の吸収による輸送効率の向上、事前情報伝達によるコンテナターミナル処理能力の向上が図られています。

このように名古屋港では、早くから民間活力を積極的に導入し、各時代において最適な整備手法を採用してコンテナターミナルを整備してきたことから、コンテナターミナルの運営主体が、名古屋港管理組合と複数の民間企業で構成されてきました。平成23年3月の港湾法改正により創設された港湾運営会社制度への対応では、名古屋港と四日市港の港湾管理者は、伊勢湾の港湾運営会社による一体的なコンテナターミナル運営の実現に向けて、平成29年5月に名古屋四日市国際港湾株式会社（NYP）を設立し、同社は、同年11月に国から港湾運営会社としての指定を受けると同時に、国や港湾管理者等からコンテナターミナル施設を一元的に借り受け、運営を開始しました。これにより、名古屋港では、NYPによるコンテナターミナルの一元的な管理運営が実現し、これまでの民間による先進的かつ効率的な取組を生かしつつ、無利子貸付金を活用したガントリークレーン等の上物施設整備を進めるなど、港湾利用者サービスの向上に取り組んでいます。

また、名古屋港では自動車輸出も盛んです。平成30年の自動車輸出台数（約138万台）、金額（約3兆円）はともに日本一で、自動車部品を合わせると輸出貨物の7割近くが自動車関連で占められています。

アクセス面では、港内及び周辺に5つのインターチェンジ

がある伊勢湾岸自動車道が、現在、東名高速道路、東名阪自動車道、名古屋第二環状自動車道と接続され、一部区間が供用開始された新東名高速道路、新名神高速道路とも結ばれています。こうした高規格幹線道路の整備に加え、平成17年の中部国際空港の開港により、海・陸・空の最適な輸送形態が選択できる環境下で、その相乗効果が期待されています。

安全・安心な港づくりの面でも、高潮・津波などの自然災害から物流と暮らしを守るため、防災体制の確立や施設の耐震強化などにいち早く取り組んできました。加えて改正SOLAS条約（海上における人命の安全のための国際条約）に対応した港湾施設の保安対策として、保安設備（フェンス・監視カメラ等）の設置や保安体制の確立も図っています。

一方、名古屋港が進める「親しまれる港づくり」の中心拠点の一つであるガーデンふ頭には、名古屋港水族館や名古屋海洋博物館・展望室を備えた名古屋港ポートビル、南極観測船「ふじ」、臨港緑園などがあり、客船の寄港、みなと祭を始めとするイベントも多数開催されています。

あおなみ線により名古屋駅と約24分で結ばれている金城ふ頭には、国際展示場やテーマパーク、フットサルアリーナなどが整備されており、名古屋市と連携を図りながら、交流拠点の開発に取り組んでいます。

この他、港内には、パブリックゴルフ場「名古屋港ゴルフ倶楽部（富浜コース）」、人工海浜等が整備されている「新舞子マリンパーク」、プレジャーボート410隻が収容可能な「新舞子ボートパーク」、テニスやサイクリングが楽しめるスポーツ・レジャー施設や緑地、さらに、ヨット訓練施設等の海事思想普及施設が整備され、地域住民や来港者が気楽に利用できるレクリエーションの場を提供しています。

このように名古屋港では、中部のものづくりと県・市民の暮らしを支えていくため、港湾利用者や地域の要請にも的確に対応した効率的かつ効果的な港湾行政が展開されています。